

船まで家の人達が出迎えに来てくれたので皆と別行動にて結城駅に帰って来ましたら、部落の人達が出迎えてくれた。八月八日、四年九カ月ぶりに自宅に着いた。

今も元気に生活しています。先祖のおかげと毎日感謝の気持ちでおります。

シベリア収容所生活の三カ年(二)

栃木県 加藤 源四郎

召集 昭和十九年 一二九六八部隊(新京)

階級 一等兵(終戦は奉天)

収容所 サマルカンド(中央アジア)

帰国 昭和二十三年九月

帰国後 会社員(現状 無職)

うそつきソ連兵と数え方

終戦を奉天(瀋陽)で無線で知った。ソ連兵はヤボ

ンダモイ、ヤボンダモイとどなりながら、装具は持てるだけ持て、ベストトラベストラと、約千人くらい列車に乗り込んだ。列車は走りだし、どの辺か小さな坂らしい所で止まった。全員下車して列車を押す。徐々に動きだし、また乗った。生まれて初めての体験だった。列車は北へ北へと……。

准尉は車中で、今晚あたりシベリア本線に入るだろう、翌朝太陽が前方に見えたら日本に帰るのだ、しかし後ろから明るくなったら捕虜だ、まあ三年くらいは覚悟しなければならんぞ。太陽は後ろから、なんだソ連兵のうそつき、俺たちはどうなるんだらう。誰もが不安な顔つきで黙っていた。

列車は草原や林の中を西へ西へと走り続けて四十日目に、何もない草原の終点に到着した。それから千人の行列、重い荷物を背負って湖の端を通り四時頃収容所らしい土の屋根舎の入口に集結した。一時間ぐらいで門が開き、中から囚人らしい粗末な姿をした女二十人ぐらいが二人の歩哨に連れられてどこかへ移動して行った。収容所の裏は小高い岩山、前はダムの湖。は

るかに、大きな高い煙突が二本（火力発電所か）立っている。すぐ中に入れるかと思いきや駄目でした。ソ連兵の人員掌握に手間取っているらしい。日本兵の場合、例えば二十三人いても整列となれば四列に並び、一、二、三、四、五と、四人掛ける五と掛け算をして三人をプラスし二十三人と数える。ソ兵は四列では計算は出来ない。五列でないと駄目。ペーチペーチとなる理由も分かった。後で知ったが数え方が違う。五人、十人、十五人、二十人、あと三人残ったので全部で何人かは分からない。またやり直し、最後には五人ずつ一歩前に出し、手で仕切って数えた。従って、全員中に入ったのは十二時頃と記憶している。

便所と寝小便

入所した翌日から小隊ごとに作業に出かけた。収容所に帰ると、一部屋百人くらいだが、上下二段の板床で自分達が背負ってきた二枚の毛布に包まって寝るが、寒さには参った。便所は舎の中にはない、収容所の中程の北側に二カ所あった。一カ所で二十人くらい

が同時使用の二カ所、夜間便所に行くのも大変。山羊の毛皮、フェルトの半長を履き便所に。しかし大半は途中で用をして急いで帰ってくる。歩き立小便だ。翌朝見ると通路の両側は真黄色。特に左側はひどい。これはホースを左側に出す者が多いからだ。ある晩は寒くて八回も便所に行き、またある晩は寝小便、少しでも乾かそうとペーチカに腰かけたが、乾くどころか、あちこちでいびき、また寝言を言う者、また突然大きな声でどなる者、本当に無情な夜の光景だった。白い雪、小便の黄色はレモン水のかかったかき氷を思い出した。

人は皆大空の雲のように

毛布に包まり寝たが、なかなか眠れない。今日も無事過ごせた。朝からの冷たい粉吹雪には泣いた。

外はピューと風の音、明日もまたと思うとぞっとした。そうだ、明日の昼のパンは朝出発前に食べよう。野原には休憩する所もない。時々思い出すのは内地の事だ。家族達はどうしているか、元気で無事であって

ほしい、祈る気持ちだ。なんとかして早く日本に帰りたい。帰るのに雲に化けて西から東に流れて行きたい。同じ収容所内のドイツ人五人は一生ドイツには帰れないだろう。しかし日本兵は集団生活で歩哨つきの毎日だ、必ず帰国出来ると思った。どんなに苦しくとも我慢だ我慢だ。ふと思いついたのは昭和十年頃、東京銀座でマンドリンを弾きながら、「人は皆大空の雲のように」と書いた白いたすきを肩にかけ街を歩いていた老人を思い出した。

死人と埋葬

同中隊の兵士が死亡した。休日に八人が就役に出て、死体を戸板にのせシャベル三個、鉄棒二本を持ってソ連兵に連れられ裏山に埋めに行った。山というより丘で、立木一本もなく雑草のみ。凍った雪を除き、壘一枚くらい、深さ五十センチメートルくらい、固く凍っているのをやと掘った。死体を入れろ、そして作業衣、下着、褲まで全部脱がせと。死体はろう人形のように、パールで足を軽くとたくと鈍い音がして

凍った石のようだった。皆で手を合わせ黙とうし土をかけた。ソ連兵はイッシュォナーダ、装具は全部持って帰れ。誰もが無言だった。こんなところで死んでたまるかの気持ちだったろう。

夜半のカチゴリリ(身体検査)

夜八時頃から中隊順に身体検査、一部屋に入り全員真裸になって一列に並び、腰かけた女医の前に立ち名前を言い、三十センチメートルぐらいの木の台に片足をのせ、のせた足のふくらはぎを軽くなぞる。そして陰毛を引張る。ポチム(どうして剃らないのか)。私は言った、ザフトラバーニア(明日は入浴日)だ。タコイタコイと手真似で剃る説明。ポニマイ(分かった)。回れ右するとお尻をつねり二級と書く。原始的だが理に合った方法だなあと考えた。翌日、毛を剃ってもらったら二三日はチクチクして困った。次回からはバリカンで自分で刈り済ませた。入浴といっても、夜間、収容所を出て約一キロ、小さな小屋、浴槽はなく、温水を器一杯貰うだけで、名ばかりの入浴で

あった。

副官身体不調

佐賀県出身の石橋元二副官は目まいがして二、三日寝込んだ。自分が新京（長春）に入隊した時、同年兵が夜明けいれんを起こして治したこと、また終戦直前部隊長が病気になる、八面城で官舎を訪問、治療したことを知っていた田畑曹長が、副官を見てくれと。日曜ごとに見舞い治療、間もなくよくなり帰国も一緒だった。帰国してから五年ほどして奥さんからの便りで死亡したことを知りました。

オーカー（病弱者）

二十年の冬は自分の小隊と作業は一緒だったが、二十一年と二十二年の十二月から二月までの三カ月はオーカーに変更された。毎月の検査はいつも二級だったが、厳寒期の三カ月は検査の翌日オーカーに変更の通知、これは副官から所長に申し入れオーカーに変更させたことがわかった。全員が作業に出かけ一人で食

堂に行く、偽オーカーが来たことと笑われたこともあった。一、二級は零下二十五度までは毎日野外作業。三級は収容所の雪の整理くらい。オーカーは仕事をしない、食べて寝るだけ、十人くらいでした。

餅つきとお供え

ブロック積み作業の休憩に近くの民家のお婆さんと話をした。日本は正月、餅をつき、丸くして二つ重ねて神様に供え、手を合わせて拝むだろう。ダダダ（その通りだ）。婆さんは涙を流し泣きだした。タームロスキー（あそこにロシア人が来た）五十メートル先に。話はピタリとやめ別の話に変えた。家の中には、ね、うし、とらと丸いカレンダーのようなものが掛かっていた。

パンは食べたし煙草は喫いたし金はなし

金を手にする法、ある、あの方法だ。製材所に行っている友人に、配給と同じ石鹼の形の角材を三個持って来てくれ。翌日三個入手した。切り口にどろを塗り

表面に石鹼を塗り出来上がり。土曜日、一個をポケットに入れ御出勤。昼休み、工場の溶接工にムイラナーダ（石鹼がほしいか）。ナーダ、セチアースニーハラシヨウ（今は駄目だ）。五時のボーが鳴ったら。ポニマイ（分かった）。作業終了の五時と同時に十ループルと交換して帰った。翌日友人の収容所の庭で会食、煙草を喫いながら、あとの二個は？ 心配するな、来週、来々週のお楽しみを待っている。

了解し難いこと

サマルカンドの町に行った時は一万人、三年目には二万人とか。その秘法は強制移住だ。A地またB地からも重点作業で、一車両に二十人くらい押し込んで表から鍵をかけ、食べ物はその小さな窓から差し入れた。大小便は下の小さな穴から樋で垂れ流し。作業に行っていると時々同じようなソ連人を乗せて駅に来る。下車しても指示あるまでどこへも動けない。また、ある工場でソ連人は話をしてくれた。自分はウクライナで牛豚鶏を飼育し、妻子がおり幸せだった。突

然一カ年だけ別な仕事を手伝ってくれと無理に列車に乗せられてここに来た。一年過ぎたので上に言うと、慣れたのだからもう一年やれ。三年目に言うと、ずうっとやるようにとの事。また、先週まで自分達の仕事の指導をしているソ連人は、今週は囚人の中にいた。ポチム（どうして）。農園で馬鈴薯を盗んで三年の刑とか。

そのほか多々あるが、全然私達には関係ないこと、いずれも先様のことである。

ダモイ（帰国）

いよいよダモイだ。待っていた発表だ。特技者約二十人くらいを残して全員夜行軍だ、カラガンダへと歩き続けた。貨物列車に乗った。列車は東へと朝の太陽はいつも前方に輝いていた。出発して二十日目、ナホトカに到着。三日ほどして連絡船に乗り、白い粉で消毒され、日本海を渡り、日本が見えた。湾が見えた。港だ、舞鶴だ。皆の顔も目も生き生きと本当にうれしそうだった。

記念品はステンレススプーン一本、カレー用より少し大きめ。仲間の職人に作ってもらったもので立派なもの。大切に保管し時々眺めてはあの頃の食事を思い出している。

帰国の皆さん、特に全抑協の全国の皆さんのますますの健康と幸せを祈っております。

〔編注〕

加藤源四郎氏の手記は、第一巻にも掲載されております。

私の人生体験記

旧満州ーシベリアー那須町

栃木県 佐藤 繁

まえがき

終戦後五十数年が過ぎ私達も年をとり、戦争経験者も少なくなり、当時の苦しい時代も忘れられがちの今

日この頃である。昭和二十年八月、我々が終戦と同時にロシア国の捕虜となり強制労働を強いられ、同胞が大勢異国の地に眠っている。私は運よく母国日本に帰る事ができ、七十四歳の老人となり、孫に囲まれ健康に恵まれた体で病気もせず毎日を幸せに暮らしている。また、平成四年、シベリア慰霊訪問団に参加、平成十一年、中国（旧満州）の慰霊訪問団にも参加し墓参を済ませ、人生に区切りのついた思いがいたします。このたび私の人生の苦勞と思いい出を後世に伝えたく筆をとりました。

私の体験記

昭和十五（一九四〇）年三月、希望に胸をはずませ大陸の地満州に開拓者として、父五十一歳、母四十五歳、私は十五歳、姉二人、妹一人、弟一人の七人家族で大規模農業を夢みて渡満しました（出生地、山形県西置賜郡鮎貝村の分村計画にて渡満、北満の地に第八次太平山開拓団に本隊として入植する）。

三月の満州は寒さも厳しく日本では想像を絶する寒